

柔らかな若柳地織を作り出す 希少な自動織機と技を見学しよう



会員さまの職場に協会職員がお邪魔し、お仕事を拝見させていただく「物振協の社会科見学」も第三弾。

今回は宮城県の指定伝統的工芸品「若柳地織」を明治末期から生産している栗原市の「千葉孝機業場」さんにお邪魔しました。

木造の工場に一歩足を踏み入れると、高い天井の下、ずらりと並んだ自動織機たちが布を織りあげてゆく真っ最中でした。ガシャン、ガシャンと織機が立てる規則的な音は、機械的というよりどこか心地よい響き。大小の歯車が回り、ヨコ糸を通すシャトルが滑るように左右に動いて、大きなベルトは梁の高さまで上ってゆきます。まるで建物全体がひとつの大きな生き物のよう。

その中で、真剣な面差しで織機を操作しておられるのが、三代目の千葉孝順さんです。

「この建物自体が音を吸収して、人の耳にやさしく入るような構造になっているらしいです」と千葉さん。泣いていたお孫さんが工場ですやすやと寝てしまったというエピソードを聞けば、その音の柔らかさが伝わるのではないでしょうか。

トヨタ自動車との 長いお付き合いのはじまり

千葉孝機業場は23台の豊田式鉄製小幅動力織機（Y式）を所有しており、現在はそのうち6台が稼働しています。この織機はトヨタグループの創始者、豊田佐吉が発明したものです。現役で稼働しているものは少なく大変貴重なのだとか。その驚きは、トヨタ自動車にとっても同じだったようです。